宮大工の育て方

放り出し待つ 気づくまで

小川三夫さんに聞く

弟子には簡単に教えたらだめなんです

神社仏閣の建築・修復に携わる宮大工の小川三夫さん（67）は、古来の徒弟制度を踏襲し、住み込み方式で100人以上の弟子を育ててきた。ただし、小川さんは「育てた」のでなく、弟子が自力で育つ環境を用意しただけという。現代によくある懇切丁寧な指導では、自分で考えられないひ弱な人間ができてしまう。「教えずに放り出し、本人がはい上がっていくようにしなくてはだめだ」と説く。

「みんなで一緒に寝泊まりして、同じメシを食い、同じ空気を感じながら生活すれば、教えなくても自然に伝わっていきますわ。体の動きも、考え方も自然に師匠に似てきますよ」

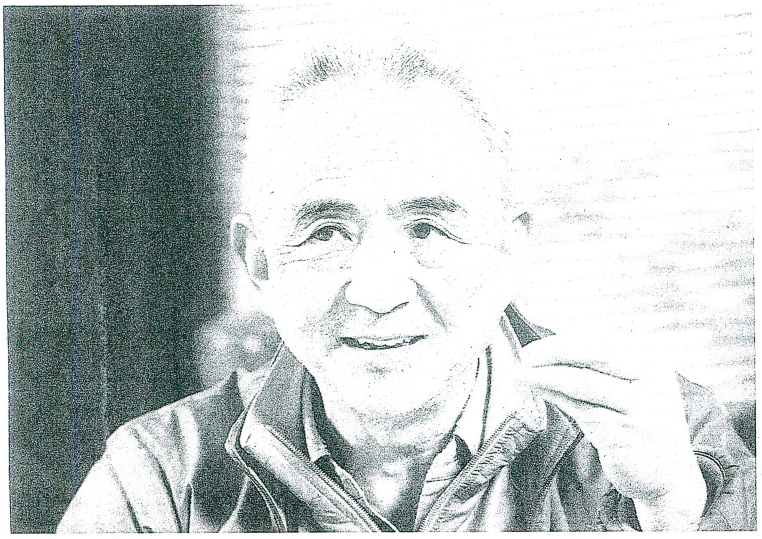
「うちに入った子は、まずメシ作りをやる。最初はろくなものが作れなくても、そのうち、喜んでもらおうと自然においしいものを作るようになるんです。メシを作らせると段取りの良さや思いやりがわかる。掃除をさせると仕事に向かう姿勢や性格がわかりますね」

弟子たちは夜、ひたすら刃物を研ぐ。刃物研ぎは宮大工を育てる上で欠かせないという。

「先輩たちと一緒に研いでいると、隣から見て『すばらしい刃がついているな』とわかるんですよ。それでも先輩の方はまだだと思っているから研ぎ続ける。十分でないと思ううちは懸命にやる。その気持ちが大切なんですね。その先輩のすごさを目の当たりにするから、懸命に研がなくてはと顔つきが変わってくる」

「職人は自分に合った使いやすい刃物を持つことが大切。よく切れる刃物を持てば、刃物に恥じる仕事をしなくなる。根性から何から、刃物を研ぐことで学ぶんですよね」

「先輩がきれいにカンナをかけているのを見ていると、自分も1日でも早くああいうふうにかけたい、かけたいと思ってくる。十分に思わせておいて『削ってみい』って削らせるんですよ。すると、うれしくて柱が板になっちゃうくらいに削ります。その時大切なのは、自分の持っている一番いいカンナを貸すこと。最高の切れ味を知ったら、人間が一気に変わります」



刃物研ぎ 自らを磨く

「だから、弟子には簡単に教えたらだめなんです。教えたら何かできなかった時、『教わってないからできません』というふうになってしまう。教わらないで自分で苦労して考えてやった子は、その限界を乗り越えられる。放っておいて気づくまで待つということをしていかなくちゃ、人なんか育っていかないんじゃないですかね」

木も人も、ふぞろいでないと強くならない

宮大工は寺社の建造物を見れば、それを造った千年以上前の人と「会話」ができるという。

「薬師寺の塔の中などに入って削り肌なんかを見てるうちに、ああ、大変な思いをして削ったんだなあとか、いろんなことを考えます。塔に上ると奈良の都がずっと見渡せる。西大寺、東大寺、興福寺と、本当にすばらしい都ですよ。それを1300年ぐらい前に、60年ほどで一気に造り上げた。あんな力はどっから出てきたんか、と思います」

「昔の大工道具でやれと言われても、今の人はできないですわ。使い方が難しいし、体力もない。当時、鉄の塊みたいな道具だけはまあ作れたんですね。斧とか鉞（木を粗削りする際に使う鍬に似た工具）とかくらいですよ。そんな道具を使って1300年前の人がたたき切った跡なんか見たら、すごいでえ。昔の人は、今の人に比べて知恵が違うな。今の人は頭がいいように見えるけど、工夫して生きるという意味では劣っているんでないか」

長年の宮大工の経験から、木も人も、ふぞろいでないといけない、と考えている。

「木を上から下にひく鋸が、昔はなかったんです。だから、みんな縦に木を割っている。木は生まれたままにしか割れませんから、どれといって同じものはないんですよ。そんなふうに、ふぞろいの方がいいのです。同じものが集まったら、ろくなことがない。自分たちはこれを『木が総持ちで塔を支えている』と言うんです。一本一本が強みを生かして支え合っている。それだから強いんですよ」

きれいで均質的な現代建築に対し、古代建築は粗削りだが、そこに強さがある。

「製材機なら木の繊維を切ってしまいます。けれども縦に割っていると、繊維が切られず、自然のまま通っているから強い。古代建築は自然をうまく生かしきっているから長く耐えられるんです」

「俺が一番好きなのは東大寺の転害門。奈良時代の国宝の門です。この門は正面の南側から見ると木が節だらけ。裏に隠れている側はきれいなんです。それはそうですよ。山に生えている時には、南の方に多く枝が出るんですから。それを南に向けなくちゃ嘘なんですよ。今なら節がなくてきれいな北側を南に向けるでしょうね。こっちは立木の時に日の光に当たったことがない。グルっと南の方に向けられたら木は弱ってしまう」

「人間も一つの組織を支えていくには、いろんな人を適材適所で使っていかなくちゃだめだ。同じ人ばかりが集まったら何にも気づかないし、力が出ないですよね」

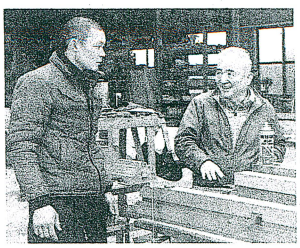
（編集委員　平田浩司）

おがわ・みつお　1947年栃木県生まれ。高校の修学旅行で法隆寺の五重塔に感動し、宮大工を志す。法隆寺宮大工・西岡常一棟梁（とうりょう）の唯一の内弟子となり、法輪寺三重塔の再建などに従事。1977年寺社建築の「鵤（いかるが）工舎」設立。著書に「棟梁」（作家・塩野米松による聞き書き）など。

「上がいたら組織がよどむ」

棟梁退き見守る流儀

鵤（いかるが）工舎（栃木県塩谷町）を訪れると、木の香りが立ち込める静寂な作業場で若者らが黙々とカンナがけなどに励んでいる。職人は今30人ほど。「昔は中学を出てすぐ始めないと遅いと言われたが、今の子は幼いから高卒くらいがいいでしょうね」と小川三夫さん。



鵤工舎で修業中の弟子に声をかける小川さん

30歳くらいまで働き、基礎が身につくと独立していく。「これからという子を出すのはもったいないけど、上がいたら組織がよどんで下が育たないからね」。寺社建築の現場では、時に延べ数千人以上を束ねる。自身の経験から、棟梁に一番大事なのは「全責任を負う」こと。「それができなければ物をつくるんじゃねえということですな」

いつまでも自分がいたら後進が育たない、と60歳で棟梁を退いたが、引き続き若者たちと一緒に寝泊まりし、現場に立つ。「本当は早く1人で仏具でも作りたいけど、まだ許してもらえないみたいで」。安易に流れる時代に抗（あらが）うような流儀で、弟子たちを見守り続ける。